

改訂：2026 年 8 月 12 日

AWS 上の Cisco ISE の使用に関する既知の制限事項

AWS 上の Cisco ISE の使用に関する既知の制限事項

AWS で Cisco ISE を使用する場合の既知の制限事項は次のとおりです。

サポートの制限事項

- Amazon VPC は、レイヤ 3 機能のみをサポートします。AWS インスタンス上の Cisco ISE ノードは、レイヤ 1 およびレイヤ 2 の機能に依存する Cisco ISE 機能をサポートしません。たとえば、Cisco ISE CLI を使用する DHCP SPAN プロファイラプローブおよび CDP プロトコルとの連携動作は、現在サポートされていません。

オンプレミスデバイスから VPC への通信は安全である必要があります。

- NIC ボンディングはサポートされていません。
- デュアル NIC は、2 つの NIC のみ（ギガビットイーサネット 0 とギガビットイーサネット 1 のみ）でサポートされます。Cisco ISE インスタンスでセカンダリ NIC を設定するには、次の手順を実行します。
 1. AWS でネットワーク インターフェイス オブジェクトを作成します。
 2. Cisco ISE インスタンスの電源をオフにします。
 3. このネットワーク インターフェイス オブジェクトを Cisco ISE にアタッチします。
 4. AWS に Cisco ISE をインストールして起動します。
 5. Cisco ISE CLI を使用して、ネットワーク インターフェイス オブジェクトの IP アドレスをセカンダリ NIC として手動で設定します。
- Amazon EC2 ユーザーデータスクリプトはサポートされていません。

設定の制限事項

次のような制限があります。

- Cisco ISE インスタンスの Amazon EBS スナップショットを取得し、そのスナップショットを使用して別の EBS ボリュームを作成できません。
- AWS を介して Cisco ISE を起動する場合、IPv6 ベースの NTP サーバーを設定できません。Cisco ISE リリース 3.5 以降、IPv6 ベースの NTP サーバーは、デュアルスタック インスタンスと純粋な IPv6 インスタンスの両方でサポートされています。
- 正常に作成されたインスタンスの IP アドレスは変更できません。
- 初期管理者ユーザーアカウント名は生成できません。初期管理者ユーザーアカウント名 `iseadmin` がデフォルトで生成されます。このユーザーアカウント名は、インストールプロセスの完了後に Cisco ISE への SSH アクセスと GUI アクセスの両方に使用されます。

Cisco ISE は IP アドレス 169.254.169.254 を介して AWS クラウドにトラフィックを送信して、インスタンスの詳細を取得します。これは、それがクラウドインスタンスであるかどうかを確認するためのものであり、オンプレミスの展開では無視できます。

CLI の制限事項

CLI の制限事項は次のとおりです。

- パスワードベースの認証を使用した Cisco ISE CLI への SSH アクセスは、AWS ではサポートされていません。セキュリティを確保したキーペアを介してのみ Cisco ISE CLI にアクセスできます。秘密キー（または PEM）ファイルを使用しており、そのファイルを失うと、Cisco ISE CLI にアクセスできなくなります。パスワードベースの認証方式を使用して Cisco ISE CLI にアクセスする統合は、サポートされていません（たとえば、Cisco Catalyst Center リリース 2.1.2 以前）。
- Cisco ISE リリース 3.1 の場合、AWS 経由で起動した Cisco ISE インスタンスを介して `show inventory` コマンドを実行すると、AWS 上の Cisco ISE のインスタンスタイプは出力に表示されません。この問題は、Cisco ISE リリース 3.1 パッチ 1 以降のリリースで解決されています。

メモリ、ディスクサイズ、ボリュームの制限事項

メモリ、ディスクサイズ、ボリュームの制限事項は次のとおりです。

- EC2 インスタンスのサイズは変更できません。
- Cisco ISE ディスク EBS ボリュームは AMI として変換できません。その後、その AMI では別の EC2 インスタンスを再起動できません。
- 設定する Cisco ISE CFT で、ボリュームサイズを GB 単位で定義します。ただし、AWS は EBS ストレージボリュームをギビバイト (GiB) で作成します。したがって、Cisco ISE CFT でボリュームサイズとして 600 を入力すると、AWS は 600 GiB（または 644.25 GB）の EBS ボリュームを作成します。
- Cisco ISE がアイドル状態のときに、「仮想マシンリソースが不十分 (Insufficient Virtual Machine Resources)」というアラームを受信する場合があります。CPU 周波数は、効果的な電力節約のために必要なベースライン周波数 (2 GHz) より低く維持されるため、このアラームは無視できます。

展開の制限事項

次の展開タイプがサポートされていますが、ノード間遅延が 300 ミリ秒未満であることを確認する必要があります。

- オンプレミス上の一部の Cisco ISE ノードと AWS の一部のノードを使用したハイブリッド展開。
- VPC ピアリング接続によるリージョン間展開。

アップグレードの制限事項

Cisco ISE アップグレードワークフローは、AWS 上の Cisco ISE では使用できません。新規インストールのみがサポートされています。ただし、設定データのバックアップと復元は実行できます。

参考資料

ハイブリッド Cisco ISE 展開のアップグレードについては、[ハイブリッド展開のアップグレードのガイドライン](#)を参照してください。

遅延の制限事項

オンプレミスにある外部アイデンティティソースを統合できます。ただし、遅延のため、オンプレミスのアイデンティティソースを使用した場合の Cisco ISE パフォーマンスは、AWS でホストされるアイデンティティソースまたは Cisco ISE の内部ユーザーデータベースを使用した場合の Cisco ISE パフォーマンスと同等ではありません。

ユーザーデータのバックアップと復元の制限事項

ユーザーデータのバックアップと復元の制限事項は次のとおりです。

- ユーザーデータの取得は、メタデータ V1 (IMDSv1) でのみ機能し、V2 では機能しません。
- Cisco ISE CLI または GUI を使用して設定データのバックアップ中に復元操作を実行する場合は、ADE-OS パラメータを含めないでください。

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。